
日本学術会議 協力学術研究団体

全国大学音楽教育学会

第37回全国大会《オンライン開催》 プログラム Web版

大会テーマ

乳幼児期に育てたい非認知能力とは

2022年8月26日（金）

National Association of College Music Education ● NACOME
The 37th Annual Conference
On Line

主催：全国大学音楽教育学会

主管：全国大学音楽教育学会中・四国地区学会

全国大学音楽教育学会

理事長 木許 隆

第 37 回全国大会《倉敷大会・オンライン開催》を開催するにあたり、ごあいさつ申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が中国から報告され、日本国内で確認されたのが 2020 年の 1 月でした。そして、感染症の蔓延は、一進一退をくりかえし今日に至っています。街の人を見ると、いつの間にか「with コロナ」の状況に慣れてしまっているように感じます。また、7 月には、新しい感染症が日本へ入ってきたと言われていています。不安の中で生活しなければならない状況に立たされた私たちは、「今を生きる」ことに奮闘していると言っても良いでしょう。

その中、2021 年に開催した第 36 回全国大会《オンライン開催・大阪大会》は、2 年に渡って関西地区学会のみなさんにご尽力いただき、会期を終えることができました。全てが初めての試みとなりましたが、新しい学びの形を提供していただき、本学会にとって大きく前進する機会となりました。その最後に、櫻井副理事長より「来年は、倉敷（岡山）でお会いしましょう。」と、画面越しにお話しいただいたことを思い出します。

2022 年に入り、第 37 回全国大会の開催方針を決定する臨時理事会を開催しました。そして、本大会も前回大会同様、オンライン開催とすることを決定しました。しかし、中・四国地区学会のみなさんにご尽力いただき、「乳幼児期に育てたい非認知能力とは」とうテーマのもと、鈴木裕美先生の基調講演を聴かせていただく機会を得ることができました。これは、本学会をより発展させる機会となるのではないかと喜んでおります。

最後になりましたが、本大会を開催するにあたりご尽力いただいた中・四国地区学会実行委員のみなさんには、心より感謝申し上げます。そして、会員の皆さまには、昨年同様、学会運営に関する不安を抱かせてしまったことに対し、深くお詫び申し上げます。

第 37 回 全国大会開催にあたって

全国大学音楽教育学会

第 37 回全国大会実行委員長 梶間 奈保

本日、令和 4 年 8 月 26 日（金）に、第 37 回全国大会をオンライン方式により開催させていただきます。全国大会の検討当初は、新型コロナウイルスの感染拡大が収まりつつある状況であり、倉敷市に会員の皆さまをお迎えすることを楽しみに実行員及び、中・四国地区学会の会員一同準備を進めてまいりました。しかしながら、新型コロナウイルスの影響が徐々に見え始め、会員の皆様方のご健康と安全の確保の観点から、昨年度に引き続きオンラインによる開催となりました。本大会の開催にあたりましては、木許隆理事長をはじめ、全国の会員の皆様、関係各位の先生方のご理解とご支援のもと大会が無事開催されますこと、大会実行委員長として心から感謝申し上げます。

今回の全国大会は、メインテーマとして“乳幼児期に育てたい非認知能力とは”と題して、鈴木裕美先生にご講演いただきます。近年、非認知能力については着目されていますが、特に、幼児期から小学校低学年にかけて、この非認知能力を保育の活動や初等教育での学びの中にどのように育んでいくのが重視されており、感性や表現の力を涵養する音楽にも、非認知能力を培う力が十分にあるといえます。知的な学びや技術的側面でも子どもの音楽との関係性を見るのではなく、ごく自然に音楽を感じる気持ちや保育者・養育者からの素朴な歌いかけや言葉かけなど、音や音楽を介して人と関わっていくことの重要性について、鈴木先生のご講演を通して会員の皆様と一緒に考えていければと思います。

また研究発表（口頭発表）では、10 件のお申し出をいただきました。コロナ禍で中々研究に取り組みにくい環境だったにも関わらず、多様な研究発表内容となり、全国大会に向けて準備を進めていただきました発表者の先生方に感謝申し上げます。

なお、この度、オンライン方式の開催となったため、村中幸子先生によるワークショップは残念ながら中止することになりました。オンラインという特別な環境下の中で、音楽表現の可能性を十分に発揮できるよう大会運営側として実施できなかったこと、お詫び申し上げます。今後、様々な状況に応じて音楽の可能性を引き出すことができるよう、検討していきたいと思っております。

最後に重ねてではありますが、本大会の開催に際し、多くの皆様方にご支援ご協力を賜りましたことに心から感謝申し上げ、第 37 回全国大会の成功と全国音楽教育学会の発展を切に願ひまして開催のご挨拶とさせていただきます。

日程 *すべて ZOOM ミーティングによるオンライン形式

2022年8月26日(金)

■第1会場

10:20~10:30 開会式

開会の挨拶：全国大学音楽教育学会 理事長 木許 隆

10:30~12:00 基調講演 「非認知能力を育てる子どもへの関わり」

講師・鈴木裕美氏（香川大学医学部小児科医）

12:00~12:25 全国大学音楽教育学会 総会

12:25~12:30 次回大会のご案内

第38回全国大会 実行委員長 関東地区 二宮紀子

(12:30~13:30 昼休憩)

■第2会場、第3会場

13:30~16:10 研究発表

	第2会場【研究発表A】	第3会場【研究発表B】
13:30~13:55	A-1	B-1
13:55~14:20	A-2	B-2
14:20~14:45	A-3	B-3
14:45~15:00	休憩（15分間）	
15:00~15:25	A-4	B-4
15:25~15:50	A-5	B-5

■第1会場

16:00 閉会式

閉会の挨拶：全国大学音楽教育学会 副理事長 小池美知子

基調講演 「非認知能力を育てる子どもへの関わり」

講師・鈴木 裕美氏（香川大学医学部小児科医）

【プロフィール】

学歴：ハワイ大学大学院公衆衛生学修士、香川大学医学部医学科医学士、医学博士

主な職歴：2010年より香川大学附属病院勤務、2012年より同病院小児科、

2014年香川大学医学部公衆衛生学、2018年より現職（香川大学医学部衛生学）

専門：一般小児、母子保健、公衆衛生学

所属学会等：日本小児科学会、日本公衆衛生学会

[学外活動]

2018年～現在 健やかあすなろプロジェクト（子育て支援事業）×香川県三木町

2021年～現在 生活リズムでパワーUP事業×香川県教育委員会

2020年 子どものネット依存対策・ネット利用適正化推進事業×香川県教育委員会

2017年～2019年 非認知スキル向上事業×香川県教育委員会

2017年～2019年 国際医療支援：ミャンマーにおける核黄疸撲滅プロジェクト

[現在の学会活動等]

日本小児科学会、日本公衆衛生学会

[現在の社会活動等]

NPO 法人親の育ちサポートかがわ理事長

NPO 法人トリプルP ジャパン

香川県里親会理事

かがわ県子どもの死亡登録検証委員会

かがわ子育て支援県民会議会

[主な研究業績]

- 1) Hour-specific Nomogram for Transcutaneous Bilirubin in Newborns in Myanmar. *Pediatrics International* 2020; 62: 1049-1053.
- 2) Wearable sensors reveal that parents do not know children's sleep time. *Journal of District Environment/Health/Welfare Research* 2019; 22: 1-8.
- 3) Behavior problems and dysfunctional parenting: a cross-sectional study in Japan. *Pediatrics International* published online on 22 July, 2019.
- 4) トリプルP～前向き子育て17の技術～改訂第2版. 診断と治療社 2022.
- 5) Zoomを用いた子育てチャットルーム：赤ちゃんから思春期の子どもを育てる親のために. *地域環境保健福祉研究*.24(1): 19-25, 2021.
- 6) コロナ禍の子育て支援～香川県内の民間支援団体の取組と課題～. *地域環境保健福祉研究*.23(1): 45-51, 2020.
- 7) 子どもの非認知スキル向上事業～香川大学との連携による家庭教育支援を通して～. *社会教育*. 861: 30-34, 2018.
- 8) ウェラブルセンサーを用いた生活習慣調査の課題と展望. *地域環境保健福祉研究*. 20: 53-60, 2017.
- 9) 香川県における子育て支援プログラム導入の試み ～「前向き子育てプログラム（トリプルP）」の有用性の検討～. *地域環境保健福祉研究*.19(1): 25-32, 2016.

はじめに

非認知能力とは人間が生きていくために大切な能力（やりぬく力、自制心、意欲、積極性、社会性など）で自己実現の原動力となり、人を成功に導くものです。非認知能力に関する先行研究では、非認知能力が高いと子どもの学習意欲が増し、成績がよくなる、学校・家庭共により生活態度を身に着ける、心身ともに健康度が高い、社会的地位が高いなどがわかっています。また、親子関係の良い子どもは、精神的健康度が良好で非認知能力も高い傾向にあります。非認知能力は幼児期に芽生え、学童期や思春期、それ以降も長い時間をかけて伸びていくと言われています。思春期に精神的健康度が悪化するのと呼応して非認知能力も一旦低下しますが、思春期を過ぎると再度伸びていくという報告も見られます。

1. 非認知能力と前頭前野

非認知能力は、脳の前頭前野に存在し、脳全体の30%を占めています。出生時はほとんど機能していませんが、安定した愛着形成（保護者と子どもの絆で結ばれた関係）の後、2～3歳くらいから発達していきます。日常の中でできることが一つずつ増えてたり、外の世界に興味関心が広がり、夢中になって遊び、探索するとき、中脳の一部から前頭前野に向かってドーパミンが放射されます。すると、子どもは喜びや達成感を味わい、前頭前野が活性化されます。その喜びを再び得るために行動を繰り返すことにより、ドーパミンが何度も放射されます。それにより脳の報酬神経回路が強化され、前頭前野にある非認知能力が育つのです。

重要なことは、次の図に示すように子どもの安定した愛着の上に芽生える非認知能力に前向きな声かけ（ポジティブシャワー）を行い、ドーパミンをたくさん放射させることです。例えば、子どもが自主的に遊びを考え、それに没頭することを楽しみ、かつ周囲の大人から励まされたり、ほめられたりすると、たくさんのドーパミンが前頭前野に放射され、そこにある「積極性」や「自主性」、「創造力」といった非認知能力が発達するのです。



2. 非認知能力と愛着

非認知能力を育てるには、親の適切な関わりによって築かれる安定した愛着が必要です。では、安定した愛着を築くにはどうしたらいいのでしょうか？愛着は子どもが望む3つのことを満たすことで築かれます。「愛してほしい（愛情）」「見てほしい、聞いてほしい、分かっ

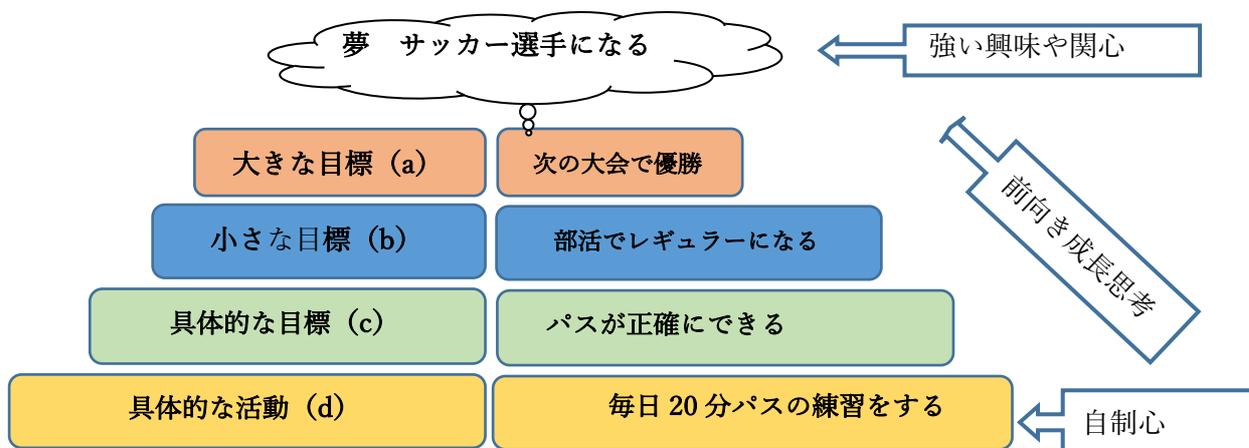
てほしい、困ったら手を差し伸べてほしい（**関心**）「認めてほしい（**前向きな注目**）」の3つです。これらが満たされて、子どもは**安心感**と**信頼感**を得ることができ、非認知能力の土台ができます。



3. 「やり抜くためのピラミッド」と非認知能力

ここで非認知能力の1つである「やり抜く力」に焦点を当てて考えます。何かをやり抜くためには、3つの項目が必要です。まずは、(1) 簡単には手に入らない大きな夢を持つための「**強い関心や興味**」で、これは幼児期からの自主的な遊びやそれを励ます大人の関わりが必要です。次に(2) 長期間続けるための「**前向き成長思考**」で、時に困難にぶつかりながらチャレンジを続け、失敗を学びに変えて歩み続けることができます。これは子どもが家庭内外で、様々な人と出会い、様々な体験をする過程で、大人から前向きな言葉かけ（ポジティブシャワー）を絶えずかけられることが必要です。それによって安心して失敗し、自分の成長を信じることができます。最後に、(3) 小さな目標を達成するための「**自制心**」です。これは、親が子どもに一貫した姿勢で、わかりやすいしつけをすることで育ちます。一緒にルールをつくり、守り、褒められる（よい成果につながる）というサイクルが、自制心と責任感の芽がある前頭前野にドーパミンを放出させ、育てていくのです。

やり抜くためのピラミッド



おわりに

非認知能力の芽は、安定した愛着から生まれます。その芽は、集団生活の中で様々な体験をする過程で時に楽しく、時に厳しい環境にさらされます。しかし、大人からポジティブシャワーをたっぷり受けることで、子ども自身が自分にポジティブシャワーをかけることができるようになり、非認知能力の芽は折れない大木に育っていきます。大人ができることは、子どもが望む体験を提供、時には一緒に楽しみながら、ポジティブシャワーを惜しみなくかけてあげることです。

MEMO

研究発表（口頭発表） *すべて ZOOM ミーティングによるオンライン形式

■研究発表 A (A-1～A-5) 【第2会場】 13:30～15:50

司会：山川智馨（鳥取短期大学）／記録：藤山あやか（滋賀文教短期大学）、竹下可奈子（新見公立大学）

- A-1 ピアノ初学者における演奏動画を活用した指導法に関する研究 ……………11
氏家史人（日本体育大学・関東地区）
- A-2 保育専攻学生の歌唱に関する意識の実態について ……………13
川村高弘（神戸女子短期大学・中・四国地区）
- A-3 歌による台湾と日本の言語的交流の実践 ……………15
（透過歌謠進行台湾及日本的語言交流及實踐）
山本学（静岡県立大学短期大学部・中部地区）

休憩（15分）

司会：上田豊（吉備国際大学）／記録：十河治幸（今治明德短期大学）、竹下可奈子（新見公立大学）

- A-4 市民の芸術文化についての意識調査 ……………17
—宮崎県延岡市を中心に—
松原由美（九州保健福祉大学・九州地区）
松原尚平（宮崎県立芸術劇場）
- A-5 小学校音楽科におけるエネルギー思考を活用した教材分析に関する研究(2) ……19
桐山由香（大阪青山大学・関西地区）
岡田知也（香川大学・関西地区）

■研究発表 B (B-1～B-5) 【第3会場】 13:30～15:50

司会：小池美知子（松山東雲女子大学）／記録：明本遥（大阪健康福祉短期大学）、永田実穂（山口芸術短期大学）

B-1 音探索から音楽文化への表現過程 ……………21

—身の回りの音を媒介に—

津田奈保子（大阪芸術大学・関西地区）

山内信子（聖和短期大学・関西地区）

B-2 音楽づくりにつなげる幼児の表現遊び ……………23

—和太鼓を用いた5歳児の事例をもとに—

佐野仁美（京都橘大学・関西地区）

岡林典子（京都女子大学・関西地区）

B-3 保育者養成校における音創作の取り組みに関する事例研究 ……………25

—オノマトペを素材として—

長谷川恭子（秋草学園短期大学・関東地区）

休憩（15分）

司会：居原田洋子（美作大学短期大学部）／記録：児嶋輝美（徳島文理大学短期大学部）、明本遥（大阪健康福祉短期大学）

B-4 「遅延した再生」を用いた即興的音あそびによる学習効果の検証 ……………27

—保育内容の指導法における情報機器及び機材の活用—

仲条幸一（つくば国際短期大学 / 筑波大学大学院・関東地区）

B-5 保育者・小学校教員養成校におけるリズム指導に関する一考察 ……………29

—身体表現を通して—

山岸多恵（兵庫教育大学非常勤講師・関西地区）

ピアノ初学者における演奏動画を活用した指導法に関する研究 －演習科目「初等音楽」対面授業での実践事例より－

氏家 史人（日本体育大学・関東地区）

1. 研究背景と目的

保育士、幼稚園・小学校教員養成課程でのピアノ演奏における課題や問題は、今なお多くの現場で叫ばれている。特に、限られたカリキュラムの中でピアノ演奏技能を高める指導法は多くの教員が苦悩しているものと推察する。筆者が勤務する学校も、ピアノ練習をしている学生がいるが、稀に動画共有サイト（YouTube など）を閲覧しながら練習をする者が見受けられる。この動画共有サイトには様々なピアノ演奏動画が存在しており、実際に演奏者が演奏している動画だけでなく、シンセシアやスコアメーカーといった演奏可視化ツールを使用したものも多い。授業でもお手本として教員にピアノ演奏をお願いし、演奏を自らの携帯で撮影し、それを見ながら練習する学生も多く見られる。

本研究ではこの事例に着目し、ピアノの指導において教育的配慮のある演奏動画を活用することで、学生のピアノ演奏技術の習得を引き上げる手立ての一つとなるのではないかと考えた。筆者は、令和3年度関東地区第2回研究会においてこの研究の導入部分を発表した。今回はその後の実践と研究結果の報告としたい。2020年に発生した新型コロナウイルス感染症によって、多くの学校がオンライン・オンデマンドでの授業を余儀なくされ、独自で教材や演奏動画を作成し、それらを配信し授業を行なってきたと思われる。対面授業が復活してきた今日、演奏動画の教材をオンライン上だけで完結させるのではなく、対面での授業にこそ演奏動画を活用することで、その指導の効果が最大限発揮されるのではないかと筆者は考えている。そこで対面授業において、ピアノ初学者を対象に〔演奏動画を使用した指導効果〕・〔演奏動画を対面授業で使用するもののメリット〕・〔学生から見た、演奏動画を使用することは手助けとなるのか〕の3点を柱とし、検証していきたい。

2. 研究方法

対象者は履修学生の内、ピアノ初学者で小学校教員採用試験受験希望者（幼稚園教諭免許取得希望者含む）20名を質問紙調査によって選別した。対象者には、授業で使用している教科書（注1）の楽譜と紐づけた演奏動画を配布し、それらを基に個人練習を行なってもらい、成果を観察し、演奏を記録した。

対象：N大学での担当科目「初等音楽」（3年）履修学生 20/130名（令和4年度前期実施 15回中6回で実施）

方法：楽譜と演奏動画を基に個人練習を実施。毎回の個人レッスン等を行わず、教員の見回りでの指導及び学生からの質問・相談に、都度対応する形で行う。手順は以下の通り。

①最初に音名や楽譜の読み方、鍵盤の位置を確認し、個人個人で曲目（主に小学校歌唱共通教材か子どもの歌から選択）を決定し、筆者が編集した演奏動画を個人に送付。対象者は楽譜とその動画を使用して練習を行う。②授業6回（各20～30分）および授業時間外での練習等の成果を見るために、毎回到達度チェックを行う。③両手で1曲弾けた段階で、記録として演奏を撮影する。また、研究の最終回で質問紙調査と簡単な面談を行い、振り返りを行う。

3. 研究結果

6回の実施期間の中で、対象者20人中13人が動画を使用した練習によって1曲を両手で弾くことができた。多い学生は4曲仕上げた。実習や新型コロナウイルス感染症対策（隔離期間等）により、対象者全員が6回すべて実施できたわけではないが、最終回の質問紙調査においても研究に対し、有益な意見が多かった。良かった点は「指づかいが見られる」「リズムやテンポが確認できる」「間違えたところに自分で気付ける」「自分のペースで何回も見られる」「高さの違う音でもどこに手を置けば良いかがわかる」が特に多かった。悪い点では「左手の指の動きが手のひらで見えづらい」「動画がないと合っているかが不安」「動画も楽譜も手も見るので忙しい」が多かった。ただ、1曲も弾けなかった学生から弾けた学生まで共通して見えたことは、「今までピアノは無理だと思っていたけれど、弾けた、弾けるかもしれないという気持ちの変化が、今後も自分で練習してみようという気にさせてくれた」というピアノに対する意識に変化が見られた学生が多かった。実際、弾けるようになった学生は回を重ねるごとに授業時間外での自主練習の時間が増えていた。

4. まとめ

本研究では、新型コロナウイルス感染症対策によって全員が実施回数をすべて達成できなかったものの、13人の学生が演奏動画を使用した練習によって伴奏を両手で弾けるまでになった。〔演奏動画を使用した指導効果〕については、初めは何がわからないのかが分からない状態の学生が多かったが、次第に尋ねる質問内容が「このリズムの指の動かし方を教えてほしい」「この和音からこの和音に移るのが難しい」など具体性のある、より細かなものへと変わっていった。また弾けるようになった学生の内4名程は、2曲目以降の練習では動画を見る回数が減り、楽譜から情報を読み取り、わからない部分や確認する際に動画を使用するようになっていた。ただしこれは教員の観察によるものである。〔演奏動画を対面授業で使用する事のメリット〕については、「実際にピアノを弾く」という行動に移すまでに、理論の部分での理解を演奏動画によって感覚的、運動的に捉えさせるという点にあると思われる。ピアノ初学者は楽譜から情報を読み取ることに對してかなりの苦手意識を持っているが、視覚や聴覚からの情報でピアノ演奏を運動的に捉え、攻略していったと考えられる。〔演奏動画を使用することは手助けとなるのか〕については、最終回の質問紙調査で20人中18人が手助けになると答えた。2人ならないと答えた理由は「ピアノ演奏は指の動かし方が難しく、結局自分のやりやすい弾き方、指づかいを自分で探さなければならないから」であった。

この演奏動画を活用した指導法で筆者が強調したいことは、決して動画ありきで弾けるようになればそれで良いということではない、という点である。今回の研究では、ほとんどが楽譜を通した理論的理解よりも、動画を視聴しピアノ演奏を運動的に捉え、見たままの動きを感覚的に弾いている学生が多かった。音楽的指導という面でこの導入に批判的意見があるかもしれないが、楽譜と演奏動画を紐付けし、なるべく楽譜・演奏動画の両方を使って練習することを推奨している。教員養成課程において少ないカリキュラムの中で、ピアノ初学者に1曲伴奏を弾けた実感を味わわせ、その経験が自己肯定感を高め、授業外においても弾けるようになりたいと思うことができれば、その講義限りの指導にならないのではないかと考える。また、このきっかけを通して音符やリズムの理解から読譜力を高め、楽譜から様々な情報を読み解いていく力をつけさせていくことができれば、持続的な学習支援に繋がると考えている。

【注】注1:中島龍一編著 やさしい伴奏で保育力アップ!!『いっしょにうたおう子どもの歌 (改訂版)』(2020)

保育専攻学生の歌唱に関する意識の実態について

川村 高弘 (神戸女子短期大学・中・四国地区)

1. 問題の所在と研究目的

保育における音楽表現活動の中で、歌唱は重要であり多くの園で取り入れられている。保育者の歌唱表現を子どもが模倣することによって、音楽的な感性と歌唱力が育まれる。それだけ大切な保育者の歌唱力であるが、日頃、養成施設内でピアノの練習をする学生の姿は目にするが、歌唱の練習をしている学生を見かけることはほとんどない。これは、学生自身が歌唱力を向上させたいという意識がそもそも低い、もしくは歌唱の練習をしづらくしている原因があるのではないか。そこで、本研究では、歌唱に対する意識、歌唱指導に関する保育観、ピアノと比較しつつ歌唱の練習時間など、保育専攻学生の歌唱に関する意識の実態を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

2-1. 調査対象者と調査時期

2022年7月、関西圏にある保育者養成校3校(2年制)に在籍している2学年141名(男性15名、女性126名)の学生を対象に質問紙調査を実施した(回収率100%)。2学年を対象とした理由は、1年次の段階との比較が可能のためである。

2-2. 調査内容

- (1)歌唱に対する意識及び保育実践力への自信：歌唱に対する意識と保育実践力への自信、ピアノ及び歌唱における練習時の抵抗感に関する12項目を作成し用いた。
- (2)歌唱指導において気をつけたい事項：子どもに歌唱指導を行う場合に特に気をつけたい事項について尋ねた。
- (3)保育現場での歌唱課題についての保育観：保育現場においてしばしば議論される歌唱課題「子どもたちが元気よく歌い過ぎる(大声で力まかせにどなるように歌う)ことの良し悪し」及び歌唱指導についての保育観について尋ねた。
- (4)ピアノ及び歌唱の練習時間について：養成校1年次、一生懸命練習している時期と現在の一日のピアノ及び歌唱の練習時間について尋ねた。

3. 結果と考察

(1)歌唱に対する意識及び保育実践力への自信

歌唱に対する意識と保育実践力への自信、ピアノ及び歌唱における練習時の抵抗感について回答した学生の割合が表1である。

多くの学生が歌うことが好きで、歌は保育の活動の中でも重要であると感じており、自分の歌唱力を向上させたいと考えているが、歌唱に関する自己課題については捉えられていないことが示された。また、学生の多くが子どもに対する歌唱指導に自信を持っていないことが明らかになった。さらに、誰かに練習している姿を見られたり、練習で出る音(歌声)を聴かれたりすることへの抵抗感について、「5. よくあてはまる」「4. 少しあてはまる」を合わせて比較してみた。すると、練習している姿を見られたりするのがいやな学生は、ピアノでは、39.4%であるのに対し、歌唱の方が、52.1%と高い。練習で出る音(歌声)を聴かれたりするのがいやな学生は、ピアノでは、38.3%であるのに対し、歌唱の方が、52.1%とこちらも高い。

表1 歌唱に対する意識及び保育実践力への自信

項目	1	2	3	4	5
【歌唱に対する意識】					
① 私は、歌うことが大好きである	0.0	8.5	18.3	31.7	41.5
② 私は、合唱などみんなと一緒に歌うことが大好きである	4.2	12.0	30.3	35.9	17.6
③ 私は、自分の歌唱力を今より向上させたいと強く思っている	2.9	6.4	22.1	30.0	38.6
④ 私は、自分の歌唱力向上に何が必要か十分に理解している	10.6	15.5	38.7	26.1	9.2
⑤ 私は、歌うことは保育の活動の中でも特に重要だと思う	1.4	4.3	18.4	53.2	22.7
【保育実践力への自信】					
⑥ 私は、子どもが楽しいと感じられるように歌唱指導することができると思う	13.4	37.3	29.6	16.2	3.5
⑦ 私は、幼児に指導できるだけの正しい歌唱法を身に付けていると思う	21.1	37.3	27.5	11.3	2.8
⑧ 私は、幼児の前で正しい歌唱の見本を歌ってみせることができると思う	18.4	31.9	33.3	9.9	6.4
【練習時の抵抗感】					
⑨ 私は、誰かにピアノを練習している姿を見られたりするのはいやである	23.2	16.9	20.4	19.7	19.7
⑩ 私は、誰かにピアノの練習で出る音を聴かれたりするのはいやである	24.8	15.6	21.3	23.4	14.9
⑪ 私は、誰かに歌唱の練習している姿を見られたりするのはいやである	12.0	11.3	24.6	30.3	21.8
⑫ 私は、誰かに歌唱の練習で出る歌声を聴かれたりするのはいやである	10.6	10.6	26.8	28.9	23.2

1.全くあてはまらない 2.あまりあてはまらない 3.どちらでもない 4.少しあてはまる
5.よくあてはまる

養成校の授業において、歌唱の指導力を高めるまでには至っていないことが窺える。また、ピアノのより歌唱の方が練習を見られたり、練習で出る音（歌声）を聴かれたりしたくないといった意識が高いため、それが歌唱の練習をしづらくさせ、さらには自己課題にも気づきにくくさせていることが考えられる。

(2)歌唱指導において気をつけたい事項

子どもに歌唱指導を行う場合に特に気をつけたい事項についての結果が表2である。

「楽しさ」が44%で一番多く、次に「リズム」の24.1%、「音程」の17%、「声の大きさ」「歌詞の意味の理解」が共に8.5%と続いている。「保育者による歌唱の見本」に関しては2.1%となっており、ほとんど重視されていないことがわかる。多くの学生が音程やリズム、曲の速さなど音楽を形づくる要素や技術的なことよりは、楽しく歌うことが大切だと捉えていることが窺える。

表2 歌唱指導において気をつけたい事項

項目	度数	%
1 音程	24	17.0
2 リズム	34	24.1
3 声の大きさ	12	8.5
4 曲の速さ	2	1.4
5 発声法	6	4.3
6 歌詞の意味の理解	12	8.5
7 保育者による歌唱の見本	3	2.1
8 ピアノ伴奏	4	2.8
9 楽しさ	44	31.2
合計	141	100.0

(3)保育現場での歌唱課題についての保育観

保育現場においてしばしば議論される歌唱課題「子どもたちが元気よく歌い過ぎる（大声で力まかせにどなるように歌う）ことの良し悪し」及び歌唱指導についての保育観について回答した学生の割合が表3である。

表3 歌唱に対する保育観 (%)

項目	1	2	3	4	5
① 私は、子どもたちがたとえどなるようになったとしても大きな声で歌うことはいいことだと思う	12.1	34.3	25.0	22.1	6.4
② 私は、子どものうちからある程度、正しい歌い方を身に付けさせた方がいいと思う	0.7	5.0	27.1	50.7	16.4

1. 全くあてはまらない 2. あまりあてはまらない 3. どちらでもない 4. 少しあてはまる
5. よくあてはまる

歌唱課題については、「1. 全くあてはまらない」「2. あまりあてはまらない」を合わせても46.4%であり、半分に達していない。しかしながら、子どものうちからある程度、正しい歌い方を身に付けさせた方がいいと考えている学生は、「5. よくあてはまる」「4. 少しあてはまる」を合わせると、67.1%と7割近いことが示された。子どもの歌唱指導についての善悪を判断することは難しいと捉えている学生が多いのではないだろうか。

(4)ピアノ及び歌唱の練習時間について

養成校1年次の一生懸命練習している時期と2年次現在の一日のピアノ及び歌唱の練習時間についての結果が表4、表5である。

表4 ピアノの練習時間

練習時間	養成校内				自宅			
	1年次		現在		1年次		現在	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
1 0時間	27	19.7	52	38.0	35	25.4	65	47.1
2 30分未満	5	3.6	11	8.0	19	13.8	18	13.0
3 30分以上1時間未満	11	8.0	8	5.8	34	24.6	30	21.7
4 1時間以上2時間未満	37	27.0	24	17.5	37	26.8	21	15.2
5 2時間以上	57	41.6	42	30.7	13	9.4	4	2.9
合計	137	100.0	137	100.0	138	100.0	138	100.0

表5 歌唱の練習時間

練習時間	養成校内				自宅			
	1年次		現在		1年次		現在	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
1 0時間	50	36.2	91	65.9	77	55.8	108	78.3
2 30分未満	12	8.7	23	16.7	8	5.8	15	10.9
3 30分以上1時間未満	13	9.4	9	6.5	11	8.0	8	5.8
4 1時間以上2時間未満	50	36.2	13	9.4	36	26.1	4	2.9
5 2時間以上	13	9.4	2	1.4	6	4.3	3	2.2
合計	138	100.0	138	100.0	138	100.0	138	100.0

養成校内及び自宅におけるピアノの練習時間については、0時間とまったく練習していない学生は1年次の段階で、養成校内19.7%、自宅25.4%だったのが、2年次現在では、養成校内38%、自宅47.1%と増加している。また、全体的に見ても養成校内及び自宅におけるピアノの練習時間については、1年次に比べて2年次現在の方が減少している。

養成校内及び自宅における歌唱の練習時間については、0時間とまったく練習していない学生は1年次の段階で、養成校内36.2%、自宅55.8%と、もともと多かったのが、2年次現在では、養成校内55.8%、自宅78.3%とさらに増加している。

ピアノと歌唱の練習時間を比較すると1年次、2年次現在ともに歌唱の練習時間の方が非常に少ない結果となった。このことから、学生自身が歌唱に対する課題を持ち歌唱力を向上させたいという意識が低いこと、また、ピアノより歌唱の方が練習を見られたり、練習で出る音（歌声）を聴かれたりすることへの恥ずかしさが高いことが原因ではないかと推察される。

参考文献 川村高弘(2021). 保育専攻学生の自己教育力と「音楽表現」保育者効力感の関連. 神戸女子短期大学. 2020年度 教職課程研究 No.5, pp.42-51.

歌による台湾と日本の言語的交流の実践 (透過歌謠進行台灣及日本的語言交流及實踐)

山本 学 (静岡県立大学短期大学部・中部地区)

※本研究の発表は一人で実施するが、研究自体は郭育志 KUO Yu Chih (嘉南薬理大学應用外語系) と共に行っていること、また、共同研究者に許諾を得たうえで単独発表していることを明記する。

1. 研究の背景

台湾観光協会によれば、2019年に日本から台湾を訪れた人は2,167,952人であった¹⁾。台湾を訪れる外国人全体は、11,864,105人なので、およそ18.2%が日本人である。同じく2019年に台湾から日本を訪れた人は4,911,681人であった。台湾からの旅客出国人数は、17,101,335人なので、およそ国外旅行者の28.7%が日本を訪れている。両国は海を挟んで隣国同士もあり、このように交流は盛んである。しかし、2020年は2019年に発生した新型コロナウイルス COVID-19の世界的な流行で、日本からの台湾旅行者は87.56%、台湾からの日本旅行者は85.79%減少した。

コロナ禍において、台湾、日本ともに企業のオンライン会議や教育機関のオンライン授業が増えている。帝国データバンクの調べでは、日本の24,516社の企業に行った働き方改革の取り組みの調査において、オンライン会議を導入した企業が49.4%と半数近くに上っている²⁾。しかし、実質的な国と国の渡航が制限され、観光系や外国語系の大学の学部学科は実地で学ぶ機会を奪われている現状がある。

そのようななか、筆者達は、台湾の嘉南薬理大学応用日本語専攻の学生と日本の静岡県立大学、静岡県立大学短期大学部の有志学生で言語的な交流の時間を設けられないかと考えた。郭は応用外国語(日本語)を教授し、山本は音楽教育学を教授している。かつて、筆者が経験した外国語の授業において「歌」を取り入れていたことを思い出し、歌の交流を入れて、その言語的交流の過程に考察を加えられないかと考えた。これが本研究の背景である。

2. 歌と外国語教育における先行研究の検討

歌を用いた外国語の学習の研究として、伊藤真(2005)³⁾、和田あずさ(2015)⁴⁾等があげられる。前者では、発音の難しさを挙げながらも、文化的な理解の促進、最終的には歌を楽しむことができたとし、後者は英語と日本語において、話し言葉のアクセントとリズムが音楽のそれらについてどう反映されているのか調査し、「朧月夜」の原語と英語版の授業実践で、学習者の音韻的な気づきが、どのようにして得られるのか、学習者の発言を元に分析している。そして、歌を利用することは、英語の音節、アクセント、リズムを教えるための効果的なリソースとなりうることに言及している。

また海外では、Barbara A Spocet (2008)⁵⁾は、アメリカにおいてもナーサリーライムが英語を母語としない学習者に対する言語教育として用いられてきたことなどを例にあげ、古くから言語教育と歌は密接な関係をもっていることについて言及している。

3. 研究の目的

本研究は、台湾と日本の国際交流の一つの手段として、それぞれの国の有名な歌を伝え合うことを用いて、それぞれの言語や文化に対する興味をどのように持ち得るのか、コミュニケーションを広げる材料となりうるのか検討することを目的とする。

4. 研究の方法

期間：2021年9月29日(wed) 11:20-12:20、14:20-15:20 (台湾時間)

参加者：2回の合計、台湾人25人、日本人15人

方法：google meetを使用。1回40分とし、歌を教え合うこと以外は自由に交流することとした。

交流に使用する楽曲：台湾語「雨夜花」、日本語「ふるさと(文部省唱歌)」

倫理的な配慮や研究協力の同意などは口頭と紙面上で説明を行い、署名を受けた。

5. 結果と考察

表1 「自分自身の良い経験になりましたか？您覺得這次的交流經驗如何？」に対する回答

国	5good	4	3	2	1bad	無回答	計
台湾	17	4	2	0	1	1	25
日本	12	3	0	0	0	0	15
計	29(72.5%)	7(17.5%)	2(5.0%)	0	1(2.5%)	1(2.5%)	40

表2 「歌による交流を必須としましたが、この試みはどうでしたか？

這次主教是透過歌曲進行交流，覺得這樣的交流方式如何呢？」に対する回答

国	5good	4	3	2	1bad	無回答	計
台湾	11	6	6	0	1	1	25
日本	5	5	5	0	0	0	15
計	16(40.0%)	11(27.5%)	11(27.5%)	0	1(2.5%)	1(2.5%)	40

自由記述からは、苦勞をした点として、普段から歌を教える機会がない、初対面で言葉の壁があることから、動画サービスをつかって教え合うなど、いろいろと工夫をした様子がわかる。また、台湾側の自由記述には、歌を歌うことが恥ずかしいという記述も見られた。また、「雨夜花」は台湾では有名な曲ということだったが、学生自身があまり知らないという事態もあった。

肯定的な意見には、歌によって交流が広がった、お互いの文化を知ることができた、よいよくお互いを知ることができたなどがあり、発音が難しかったとしながらも面白かったなどの意見も見受けられた。また、フリートークでは、話題の指定がなかったにも関わらず、お互いが好きな音楽を話題にしていたことも記述に表れていた。

6. まとめ

外国語活動に歌が用いられている研究や実践から着想を得て、今回は交流の実践の材料としてオンラインで数名ずつのグループで互いの国の有名な歌を教え合う実践を試みた。実践としては、参加者の満足度も高く、良い実践であったが、歌の交流の場面では、音楽に対する素地の面や、その歌に対する個々の理解、オンライン、初対面、言語習得のレベルの問題等で、多くの課題がみつかった。その中でも、歌によって交流が広がった、面白かったなどの肯定的意見が多かったことから、今回の課題を改善していくことで、有効な手段となりうるように思われた。また、話題の指定がないフリートークの時間にも関わらず、互いの好きな音楽を話題にしていたグループも多く、可能性を感じた実践であった。

7. 引用、参考文献

- (1) 台湾観光協会、<https://jp.taiwan.net.tw/>、2022年6月21日閲覧
- (2) 帝国データバンク、<https://www.tdb-di.com/2021/10/sp20211021.pdf>
- (3) 伊藤真(2005)「高等学校における外国語の歌の取り扱いに関する考察：中国語の歌を用いた授業を例に <第2部 教科研究>」、中等教育研究紀要 / 広島大学附属福山中・高等学校 (45), pp.249-254
- (4) 和田あずさ (2015)「小学校外国語活動における歌活動事例の音韻論的分析」、東京大学大学院教育学研究科紀要(54),pp.491-501
- (5) Barbara A Sposet (2008) The Role of Music In Second Language Acquisition: A Bibliographical Review of Seventy Years of Research, Edwin ,Mellen Pr, 1937-2007

市民の芸術文化についての意識調査 —宮崎県延岡市を中心に—

松原 由美（九州保健福祉大学・九州地区）
松原 尚平（宮崎県立芸術劇場）

1. はじめに

近年全国各地では、少子高齢化などによる人口減少、そして地域経済の不振による地方財政の悪化などにより地域の疲弊が顕在化している。直近のテーマとして、地域創生の必要性が高まっている。地域が輝きを取り戻し、活気あふれ、笑顔・感動できる社会実現のために地域の人々による総意と工夫ある活動が地域を活性化するために文化・芸術活動が重要となってくる。しかし、地域活性化のために文化活動を活用するという動きは、2002（平成14）年に閣議決定された「文化芸術の振興に関する方針」の魅力ある社会づくりを推進する力であるという考えはまだ歴史が浅く、国民に十分根付いているとは言えない状況であり。2017（平成29）年の「文化芸術基本法」においては、年齢、障害の有無、経済的な状況又は居住する地域にかかわらず、文化芸術の機会を享受することが基本理念として示されている。その文化芸術を活用して街づくりに取り組み、成功している町も多く見受けられるので参考にしてみてもはどうだろうか。本調査は、少子高齢化社会を迎え、地域経済の不振、人口の減少により地域活性化は大きな課題を持つ宮崎県延岡市の芸術文化活動の発展が市の活性化に資するという考えのもと、市民の芸術文化との関わりや意識と市民が文化的活動の拠点である延岡総合文化センターへの現状認識と期待や調査することを目的とする。

2. 研究の方法

【対象】 無作為に抽出した20代～80代延岡市民2,000人

【研究の方法】 市民にアンケートを2019年9月27日に投函し、研究の同意がある市民は記入し返信していただく方法で実施した。

【期間】 2019年9月27日に投函し、締め切りは同年10月31日とした。

【倫理的配慮】 本調査に関しては九州保健福祉大学倫理委員会の承認を得、研究の同意は市民が記入し返信していただくことで同意とした。延岡市の情報セキュリティポリシーに基づき、個人情報の保護に最大限の配慮し、情報漏洩等がないようにし、市の覚書きを延岡市に提出し、住所氏名をシールで情報を入手した。

【回答者プロフィール】

調査票のうち19通が宛先不明で返却され、返却は540通（回収率27.3%）で欠損値の高い5通を除いた535通を有効回答とした（有効回答27.0%）。男女別内訳は男性173人、女性362人で、年代別の回答者数で最も多いのは50代の145人で27.1%、次に60代の141人で25.4%ある。20代、30代の若者の回答が非常に低調であった（参考資料：図1・2）。

3. 結果

1) 延岡市民の文化活動の実態

過去1年間の市民の文化活動において何らかの活動をした人が108人(20%)、しなかった人が420人(77%)であった。また、文化的鑑賞活動においては170人(32%)が「した」、326人(61%)が「しない」と回答している(資料:表2・3参照)。文化の興味は、「興味があり」は75%、「興味がない」が23%である(資料:図3)。

文化的活動や鑑賞活動を行っていない理由は、「情報がない、興味がある企画がない、費用の問題」としている(資料:図4)。また、鑑賞活動の内容は「映画・絵画・音楽」が多く、実際活動した内容は「合唱・民謡・カラオケ」が多かった(資料:図5・6)。文化活動や鑑賞の場所は「文化センター」が137人と多かった(資料:図7)。

2) 延岡総合文化センターについて

延岡市の文化の拠点である文化センターの過去1年の来館状況は、回答者の62%が来館していると回答し、その目的は、「催し物を観るため、子どもの学校の行事、絵画や写真展の鑑賞」と続いている(資料:図8・9)。文化センターは、催し物の紹介や館内の賃料などを掲載している「じゃがじゃがのべおか」を毎月発行している。それは町内会の回覧板など市民が入手しやすいところに設置してあるが86%が見たことがないと回答している(資料:10)。また、文化センターが配信しているSNSは回答者の84%が情報を得ていないとし、施設内ロビーにおけるTVやチラシによる情報提供は、84%が参考にしていないと(資料:図12)。文化センターの催しは、地方誌「夕刊デイリー新聞」やケーブルTVが情報源とし、企画してほしいジャンルは、ミュージカルがもっとも多く、チケットの費用は2,500円~3,000円を希望し、ペア券の割引などを希望している(資料:図15,16,17)。さらに、文化センター市民参加型企画に関して44%が参加してみたいとしている(資料:図13・14・20)。

4. まとめ

地元の文化の拠点である文化センターの来館者が、10年間で5万人減少している。また、内閣府が発表した鑑賞活動の全国平均が76.3%であるが延岡市は半数以下の32%、兵庫県モニターでは91.4%と比較すると3分の1以下という結果であった。文化センターは、来館者の増員を目的に様々な企画改善を行っているが、今後の努力を希望する。

今回のアンケートには自由記載に多くの市民の声があったが、その中で「障がい(児)者向けの企画」や障がい者に優しいホールの希望も寄せられている。

延岡市は財政難で厳しい時だからこそ、地元商店や企業などの社会貢献的寄付をさらに募集するなど、様々な助成金をうまく活用して市民が楽しみ、そして市民が参加し明るく元気になる企画を切望するところである。

本研究にあたり、アンケートに協力いただいた延岡市民の皆様、延岡市教育委員会に深く感謝申し上げます。

注) 本研究は、令和1年度九州保健福祉大学地域創生事業の助成金を活用し、調査したものである。

小学校音楽科におけるエネルギー思考を活用した教材分析に関する研究(2)

桐山 由香 (大阪青山大学・関西地区)

岡田 知也 (香川大学・関西地区)

1. はじめに

平成29年3月に公示され令和2年度より全面実施されている新しい小学校学習指導要領(以下、新学習指導要領)では、改訂の基本方針の一つとして「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を推進することが求められている。その際の留意点の一つとして、児童に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること、学習活動(言語活動など)の質を向上させることを主眼とするものであること、「深い学び」の鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること、等が挙げられている。「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。それは各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる。音楽科における音楽的な見方・考え方については「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」と示されている。

本研究の課題意識は、これらの求められている内容に対して、これまで実践されてきた教材研究(音楽科においては多くの場合、教材となる楽曲の分析)で十分なのだろうかというところにある。児童の学びが深まろうとしている局面において、教員は専門性を発揮した教材研究でその瞬間に備え、学びの深まりに応える必要があるのではないだろうか。そこで本研究では、深い学びに寄与する教材研究の一手法として、エネルギー思考による楽曲の分析方法(いわゆる保科理論)¹⁾を用いて教材研究を試み、それらが生み出すであろう新しい学習場面について拙案を提示したい。

本要旨では詳細は省略するが、エネルギー思考による楽曲の分析では表現の中核となる「重心」となる音符をいくつかの条件に照らし定める。保科はその条件として5つの項目を示しているが、その中に『ジェットコースター音型』と判断できる音群の最低音(または、その周辺の音)という項目と「ある音群において、比較的音価が大きく、かつ、音高の高い音」という項目があり、これらの条件から、旋律の音型が音楽表現に大きく関わっているという示唆を得ることができる。

今回は、この「ジェットコースター音型」及び「長く高い音」の条件に着目し教材分析することを試みたい。一連の本研究においては、前述の課題意識に基づき、これまで小学校音楽科の歌唱共通教材のうち、小学校1年生の「うみ」「かたつむり」を取り上げ、その試案を示した^{2) 3)}。本発表では、2つの出版社による教科書に掲載されている鑑賞教材である「白鳥」を取り上げ、保科理論による教材分析の例を示すとともに、学習の一場面についての拙案を提示することとする。

2. 小学校音楽科における「深い学び」

新学習指導要領においては、基本方針の一つとして「育成を目指す資質・能力の明確化」が挙げられている。学校教育において長年その育成を目指してきた「生きる力」を改めて捉え直し、その上で「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を明確化することが示されている。すなわち、「生きて働く「知識・技能」の習得」、「未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成」、「学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養」の三つの柱で資質・能力を整理するとともに、各教科等の目標や内容についても、この三つの柱に基づく再整理がなされている。そして、これらをどのように学ぶかという視点から求められているのが「主体的・対話的で深い学びによる学習過程の改善」である。新学習指導要領総則第3「教育課程の実施と学習評価」の1「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」に、次の通り示されている⁴⁾。

「児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。特に、各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、(中略)知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、(中略)思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」

すなわち、児童が「学習の対象となる物事を捉え思考する」「知識を相互に関連付けてより深く理解する」「思いや考えを基に創造したりする」姿に導く学び＝「深い学び」が求められているのである。このことから筆者は、児童の学びが深まろうとしている局面においては、これまでの教材研究（楽曲分析）の内容では不十分ではないか、教員の専門性に基づく「引き出し」をさらに準備してその瞬間に備え、児童の学びの深まりに応える必要があるのではないかと考えるに至ったことが本研究に結び付いているのである。

註及び引用文献

- 1)保科洋、『生きた音楽表現へのアプローチ -エネルギー思考に基づく演奏解釈法-』音楽之友社、1998、p.94、p.131、他
- 2)岡田知也、桐山由香「小学校音楽科における「深い学び」に寄与する共通教材の分析(1) -エネルギー思考に基づく「うみ」の分析とその活用-」『全国大学音楽教育学会関西学会誌第2号』、2021、pp.2-7
- 3)岡田知也、桐山由香「小学校音楽科におけるエネルギー思考を活用した教材分析に関する研究」、『全国大学音楽教育学会研究紀要 第33号』、2021、pp.27-29
- 4)文部科学省『小学校学習指導要領』、東洋館出版社、2017、p.8

参考文献

- 岡田知也「教員免許状更新講習の内容構築に関する一考察 -受講者のニーズを手がかりとして-」『学校音楽教育研究』日本学校音楽教育実践学会、2010
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』東洋館出版社、2017
- 田村学『深い学び』東洋館出版社、2018

音探索から音楽文化への表現過程 —身の回りの音を媒介に—

津田 奈保子 (大阪芸術大学・関西地区)

山内 信子 (聖和短期大学・関西地区)

1. 研究の背景

近年、子どもの音に対する感性を育む音感受の研究が散見されている。そこでは、子どもに向き合い、モノから発生する音に気付き、その音を聴きながら自分に対峙する「音探索」に関する活動が注視されている。丸山(2017)¹はアフォーダンスの観点から乳幼児期の音楽的発達を捉えている。また今川(2006)²は、音を介した幼児の表現について、次第に楽器への興味が広がり、音で遊ぶ場所が形成される様子を報告している。こうした「音探索」に関する活動は、音楽の素材の一つである音との関わりを大切にする点で、乳幼児期の子どもにとって重要な活動と位置づけられる。

本研究においては、子どもが「音探索」で得た、音の情報や発見、イメージをどのように音楽の枠組みの中に取り入れ、遊び、生かしていくのかに着目する。特にモノの大きさ・材質・撥の材質の相違などによる子どもの行動や表現の変容を中心に考察を試みる。また、音楽的に表現が深まっていく過程においては、新しい情報や刺激が重要との観点から、著者らが身の回りのモノを用いた音楽コンサートを開催する。コンサート聴取の前後の活動の過程で、子どもの音やモノに対する関わり方の変容を明らかにする。また、文化的に共有される型のある音楽である〈音楽文化〉へと向かう表現過程について考察を試みる。

2. 研究方法

2.1 研究の概要

大阪府内にある認定こども園を研究協力園として、屋外と屋内に音あそびコーナーを2か所設けた。身の回りにあるモノを素材として準備し、自由あそびの中で主に5歳児と4歳児がどのようにモノの音と関わるか、その様子をビデオカメラで録画しながら観察し、事例を基に考察した。倫理的配慮から、幼児の動画撮影および研究参加については園長の同意を基に、保護者から承諾書を得た。なお、本研究は大阪芸術大学倫理審査の承認を経て実施された。

観察期間：2021年9月7日—27日（全13回）。時間は、夕方の16時—17時であった。

本コーナーには、少ない時で1—2名、多い時で10名程度が集まった。コンサート実施前は、著者らの参与を出来る限り行わず幼児のありのままの姿を観察した。コンサート実施後は、幼児の主体性を尊重しつつも著者らが奏法を模範的に示すなどの援助を行いながら観察した。素材選択に際しては、次に示すねらいに基づき準備した。

ねらい：①モノの大きさや長さや材質、および撥の種類の違いによる音の種類に気付く

②異なる音の響きを感受する

素材：段ボール太鼓（補強をして箱型で提示）（大小5種）、バケツ（大小5種）、ドラム缶（大小2種）、缶マラカス（5種×2）、紙箱オーシャンドラム（大小7種）、水道管パイプ（音階8

本)、ステンレスボール (3種)、フライパン (2種)、竹 (6種)、レインスティック (1種)
撥：フェルトマレット (5セット)、ラバーマレット (3セット)、ウッドスティック (1セット)

2.2 音楽コンサートについて

観察8回目にあたる9月16日、10時30分–11時00分、園のホールにて、著者らが音楽コンサート「耳をすましてきいてみよう！いろいろな音」を開催した。ここでは子どもたちが実際に遊んだモノを打楽器として扱い、ピアノとのアンサンブルにて実演した。プログラムは、子どもが親しみやすい曲を中心に、鑑賞と参加を交互に組み合わせて構成した。

3. まとめ

子どもの音遊びの際に、モノが楽器となるのは、モノが鳴るかどうかである。手で鳴らすよりは撥を使用するほうが鳴る。したがって子どもは撥に固執していた。しかしフェルトの撥では樹脂系のパイプは音が鳴らない。楽器になりつつあったモノも、再び単なるモノとして、遊び道具と化する。音遊びの中で、子どもはモノの音の違いや、材質による違い、撥の材質も知覚していた。

音が鳴るということ大切に、一人一人が音に対峙し、音を探索する。徐々にそれは友達との音の交流を生む。しかしいわゆる並行遊び的な関わりで、音楽的な表現や、音楽的リズムをすぐに生み出すわけではない。それでも共に顔を合わせながら音を友達と楽しむ姿が見られた。5歳児では、音楽的な表現、「海」という共有イメージの中で表現することや、音楽的なリズムの応答性の中で表現する姿も垣間見られた。音楽的な表現の交流のためには、大人による文化の紹介、つまり本研究においては同じモノを使用したコンサートや、大人の即興演奏に刺激を受けて生まれることが確認された。

大人の音楽文化を押し付けるでもなく、新しい刺激として情報を享受することで、子どもの音遊びが子どもなりの音楽文化へと発展する。いわゆるフレーズ感や、アーティキュレーション力などは未熟であっても、子どもが知っている音楽という枠組みに取り入れ、挑戦する姿が見られる。子どもが自分の出す音に価値がある、もしくは子どもなりにいいと思った音や音楽を披露することで交流が生まれる。大人が思う音楽文化を押し付けるとか、型にはめ込むとかではなく、子どもの「おもしろい」と感じるものを、他者に見てもらおうと自ら発信する力を信じるとともに、大人は新しい刺激を与えることが重要であると考えられる。

まずは音の探索から始め、一人で音を楽しむことを十分に堪能させることが重要であり、音を介して友達との交流を楽しませたい。その上で、音楽文化構築に向け、大人の関わり、つまり音楽演奏を聴くなどの音楽文化との出会いが、文化的実践の形成へ向かわせると考えられる。今後の研究で、生活に密着した形で、音楽文化が形成される方法をさらに明らかにしたい。

引用文献

- [1] 丸山慎「楽器への旅路,あるいは音への誘い：乳幼児期の音楽的発達とアフォーダンスの学習」『音楽教育実践ジャーナル』15(28)、日本音楽教育学会、2017、pp.114-124
- [2] 今川恭子「表現を育む保育環境—音を介した表現の芽生えの地図」『保育学研究』第44巻第2号、日本保育学会、2006、pp.156-166

音楽づくりにつなげる幼児の表現遊び —和太鼓を用いた5歳児の事例をもとに—

佐野 仁美（京都橘大学・関西地区）
岡林 典子（京都女子大学・関西地区）

1. 研究の背景

発表者らは、幼児の表現遊びの中に小学校の音楽づくりの活動との共通点が存在することに着目し、幼児期に音楽づくりの素地を養うために、実践的な研究を重ねてきた。幼稚園教育要領の領域「環境」では、「我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」と記され、「内容の取扱い」には、具体例として唱歌やわらべうたが示されている。発表者らの知る限り、わらべうたを取り入れた保育は増えているが、和楽器を用いた活動はまだ少ない。

小学校学習指導要領では、中学年の旋律楽器に和楽器が加えられたが、もっと早い段階で和楽器に親しむことが必要ではないだろうか。発表者らは、日本人の音感覚に基づいた子どもたちの創造性を育むための素地づくりとして、幼児期から和楽器や口唱歌を用いたプログラムを開発していきたいと考えている。

小学校の低学年の教科書に見られる音楽づくりの教材としては、主としてリズムをつくることが中心である。日本音楽に関するものとしては、「ドンドン」「ドンカカ」などのお祭りのリズムが書かれたリズムカードを組み合わせてリズムをつくる教材が挙げられる。

本発表では、小学校1～3年生を対象に和太鼓を用いた平石淑子の実践、「絵本を手掛かりにして、和太鼓で音楽をつくろう」を参考に（注1）、5歳児ではどのような表現が創発され、音楽づくりの素地を育成する可能性が見い出されるのかについて考察する。平石の学習プリントでは、庄司美智子の絵本『たいこうち たろう』に登場する和太鼓の口唱歌を唱和して音色やリズムのイメージを持ち、試しながら打った後、グループで場面を選び、太鼓の表現を声で唱えながら、それぞれのリズムや音の出し方、始め方、終わり方、つなぎ方、重ね方などを工夫し、音楽をつくるという構成になっている。

2. 研究の目的と方法

本研究の目的は、①平石淑子の実践を参考に、和太鼓を用いた音楽づくりにつなげるための5歳児を対象にした表現遊びプログラムを考案する、②実践を観察して分析し、日本人の音感覚を養い、小学校の音楽づくりへつなげるために、どのような力が育まれたかを考察する、の2点である。

2021年11月26日10:30～11:00に、A子ども園5歳児1クラス（男子11名、女子7名、計18名）で実践を行った。実践のねらいは「絵本『たいこうち たろう』の口唱歌を唱え、和太鼓の音色に親しむ」である。発表者らは実践を観察し、三方向からの録画と筆記により記録した。

子どもたちに身近な存在である絵本は、単なるリズムカードではなく、言葉や絵が子どもたちの想像力を高める働きをするのではないかと考えた。『たいこうちたろう』を用いた理由としては、①太鼓名人のたろうが雷神様に雨を降らせてもらい、日照り続きの村を救うストーリーで、太鼓がストーリーの展開に重要な役を果たす、②リズムカルな言葉の表現が多い。③繰り返しの表現が見ら

れる、④口唱歌が多用されている、の4点である。

作者の庄司三智子(1956-)は、「歌舞伎と日本画をこよなく愛する太鼓打ち」と述べ(注2)、この絵本には口唱歌が頻出する。『邦楽百科辞典』では、「唱歌」の項目に、「楽器の旋律・リズムに一定の音節をあてて口で唱えること。〈口唱歌〉ともいう」と書かれていて、祭囃子の打楽器の唱歌として、締太鼓では〈テン〉〈テ〉〈テケ〉〈テツク〉、大太鼓では〈ドン〉〈ド〉〈ドド〉など、休止符には〈ス〉や〈スッ〉が挙げられている(注3)。音の高い締太鼓には「テン」、低い大太鼓には「ドン」が用いられるように、口唱歌には太鼓の音の印象や特徴が反映されている。また小林史子は、「太鼓の口唱歌には、その音に伴う動作やイメージも含まれている」と述べているように(注4)、太鼓の口唱歌には、多様な言葉が用いられている。

実践の準備として、1週間前より保育者は読み聞かせを行い、子どもたちが絵本に慣れるようにしておいた。実践の主な内容は、①最初に教師の読み聞かせに続いて、口唱歌を口ずさむ、②グループに分かれ、好きな場面の口唱歌のリズムに合わせて、自由に和太鼓をたたき、③グループごとに発表し、観客役の子どもたちは真似て楽しむ、というものである。

3. 実践結果と考察

実践からは、口唱歌によりリズムの様々な表現が生まれた。「さんここ さんここ さんここどっこい」では、「さん」の中の撥音と「ここ」という言葉から生まれるリズムを組み合わせ、「どっこい」で休符を感じるという口唱歌を生かしたリズムをつくっていた。「てんつく てんつく てんつくつ」では、●●|●●|●●|●●|のような拍感をもとにしたリズムのほか、「てんつく」の繰り返しを感じ取って、●●|●●|●●|●●|のように表現していた。その他、口唱歌の抑揚を楽しむ姿や、観客役の子どもたちが低い位置から伸び上がるといった、強弱への関心につながるような身体表現、杵打ちや鼓面の打つ場所により音色が変わることへの気づきも観察された。

これらはすべて、小学校指導要領で示されている「音楽を形づくっている要素」である音色、リズム、旋律、強弱、形式(繰り返し)につながると考えられ、子どもたち自身によるこれらの表現が引き出された本実践は、音楽づくりの素地を育む活動であったと言えるだろう。

子どもの表現を引き出したのは、声の表現、身体表現、言葉の面白さである。音の印象や特徴だけでなく、動作やイメージが含まれる口唱歌とともに和太鼓を表現したことで、多様な表現が生まれたと考えられ、日本人の音感覚をもとにした表現になったと結論づけられる。その他、演奏している子どもと息を合わせて飛ぶ様子や、リズム、拍感や間合いを子どもたちだけで共有して楽しむ姿が見られ、保育者はそれを引き出したり、気づきを共有したりする役割を担っていた。以上のように、本実践では、保育の協同性の中で日本人の音感覚に基づく表現が育まれていったのである。

付記：本研究は、JSPS 科研費 JP21K02478, JP17K04889 の助成を受けている。

【注】

(注1) 平石淑子「連載「考え、試して、また挑戦！」第71回学習プリント 音楽づくり編 絵本を手掛かりにして、和太鼓で音楽をつくろう」『教育音楽・小学版』2019年2月号、pp.50-51。

(注2) 『たいこうちたろう』庄司美智子さく、佼成出版社、2013年。

(注3) 吉川英史監修『邦楽百科辞典』、音楽之友社、1984年、pp.516-519。

(注4) 小林史子『「創作太鼓」の音楽的特性と音楽教育への応用—『三宅島神着神輿太鼓』の成立と伝承を事例として—』『芸術研究』第13号、玉川大学芸術学部、2021年、p.51。

保育者養成校における音創作の取り組みに関する事例研究 —オノマトペを素材として—

長谷川 恭子（秋草学園短期大学・関東地区）

1. 研究の経緯

領域〈表現〉では、「内容」に「④ 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」「⑧ 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」と提示されている。また、「内容の取り扱い」③では、「自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、(中略)他の子どもの表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること」と記述されている。このような活動を行うためには、活動の過程や経験する気持ちを保育者が体験し、保育者の目線で活動の意義を捉えておくことが必要である。

そこで、筆者は保育者養成校の学生を対象に、絵本に掲載されているオノマトペや絵を手がかりに音を表現する活動に取り組んだ。保育において音を表現する事例では、オノマトペを使用したものがいくつか見られる(襄・味府 2011、岡林・山野 2021、他)。佐野・岡林・坂井(2016)は、視覚的な要素がイメージ喚起や多様な表現となり、小学校の「音楽づくり」に繋がる基礎的な感性が育成されるかを検討するために、幼児を対象として絵本『がちゃがちゃどんどん』の中の2ページを扱った実践を行なった。この実践では、記載されているオノマトペを隠した絵の部分を用い、絵からイメージされるオノマトペと動きを表現することや、楽器を使って音で表現することを行なっている。その後の保育者へのインタビューをもとにした幼児の様子との分析と、小学校における「音楽づくり」に繋がる音楽的な表現の現れについての考察から、子どもたちから自由な表現が見られたこと、楽器との自由な出会いが表現を助長したこと、音を確認するためにオノマトペが有効であることが分かった。また、佐野・岡林・坂井・大久保(2017)は、4歳児を対象に絵本『クネクネさんのいちにち きょうはマラカスのひ』を扱い、保育者と絵本に出てくるオノマトペのリズムを口ずさんだりかけ合ったりした後に身体表現をする実践から、強弱などの音楽的要素の学びや子どもたちの協同性が見られたことを報告している。両研究は小学校の「音楽づくり」への発展のために活動内容の検討・実践を行なったものと捉えるが、佐野・岡林・坂井が「何よりも子どもの自由な表現を育むことを念頭において、保育者養成を行なっていかなければならない」(前出 p.30)と述べているように、活動の何を子どもが楽しみ、どのようなことを経験するのかを保育者側が体験して理解していることが必要だと考える。子どもが〈音〉と出会い、向き合う瞬間の楽しさを保育者が経験を通して伝えることが、より子どもの活動を豊かにしていくことになるのではないかと。

本研究では、保育者養成校の学生を対象にオノマトペによる絵本を教材とした音創作の活動を行い、保育者の視点で行なった振り返りを分析することで、イメージを音に表わす活動に取り組むことの意義をどのように理解したのかを検討することとする。

2. 研究の対象と方法

A 短期大学二部 2 年生 32 名を対象に、授業「音楽・身体表現」の音楽の授業で、提示したオノマトペによる絵本 4 冊からグループ（4 人程度）で 1 冊選択し、一部のページ（オノマトペの表示あり）について音創作を行い、動画撮影した。さらに、作成した動画の音声と絵本の画像を合成・編集し、一つの動画作品を作成した。その後、作成した動画作品の上映会を行なった。この活動で、作品を作成した後と、作品を上映した後をまとめとして行った振り返りを分析する。

3. 結果と考察

実践では、4 冊の絵本『もけらもけら』『ごぶごぶ ごぼごぼ』『がちゃがちゃどんどん』『かぜフーホッホ』から一つをグループで自由に選択させたが、8 班中 7 班が『がちゃがちゃどんどん』を選択し、1 班が『ごぶごぶ ごぼごぼ』を選択した。この中から 10 ページを選択してオノマトペと絵からイメージする音を創り、作品動画として仕上げた。

作品を作成した後の振り返りでは、活動については音を表現する楽しさや感覚の違いについての発見、メンバーと協同することで想像を広げることができたことの実感などに関する記述がみられた。子どもと活動を行う観点での振り返りでは、音創りに取り組むことで音を知ることに対する欲求が高まること、作品を作り上げることの達成感、友達と協力することで協調性が育つことなどが挙げられている。

作品を上映した後のまとめの振り返り（アンケート）では、作品の作成過程で楽しかったことと難しかったことについて、共に「音を考え、楽器等を選ぶ過程」が最も多く挙げられた。その理由（自由記述）を見ると、音を探したり表現してみたりする過程でなかなか思うような音に辿り着かず難しかったと思っている反面、その活動の過程で仲間と協力してできたことが楽しいと感じている様子であった。作品を作り上げてみて、さまざまな発見ができた経験をふまえて活動全体は楽しかったと感じている。また、子どもがこの活動で何を楽しむことができるかについては、「音を考え、楽器等を選ぶ過程」「仲間と一緒に活動すること」が多く挙げられた。これについては、地震の経験をもとに認識したことだと考える。

以上のことから、学生は保育の場面で音創りの活動を行うことの意義について、音に向き合うことで音を発見し想像性が広がることや、仲間と協同することであると理解したと捉えられる。このように意義を認識して保育にあたることで、子どもに豊かな音楽表現の活動を提供できると考える。

参考文献

- 岡林典子・山野てるひ「教員養成課程における音・形・色を関連づける表現プログラムの研究Ⅱ—音（音環境）とオノマトペに関する授業内容から—」『京都女子大学教職支援センター研究紀要』第 3 号（2021） pp.1-15
- 佐野仁美・岡林典子・坂井康子「『音楽づくり』へつなげる幼児の表現遊び—絵本を用いた実践をもとに—」『関西楽理研究 XXXIII』（2016） pp.15-31
- 佐野仁美・岡林典子・坂井康子・大久保恭子「音楽づくりへつなげる幼児の表現遊び—絵本のオノマトペを用いた実践から—」『関西楽理研究 XXXIV』（2017） pp.23-42
- 襄珉卿・味府美香「オノマトペによる幼児の音楽表現の可能性」『北海道教育大学函館人文学会』（2011） pp.83-96

「遅延した再生」を用いた即興的音あそびによる学習効果の検証 —保育内容の指導法における情報機器及び機材の活用—

仲条 幸一（つくば国際短期大学 / 筑波大学大学院・関東地区）

1. はじめに（研究課題と目的）

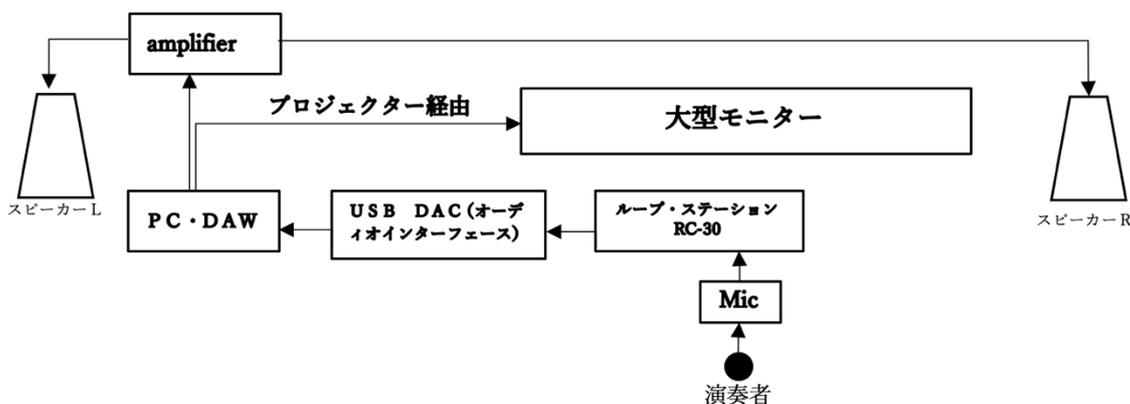
将来保育者となる学生は、幼児が感じたことや考えたことを発達に即して捉え、具体的な保育を構想する際に、情報機器等の活用を選択できることが求められる。近年、スマートフォンの普及やアプリケーションの発展により、自らの演奏を振り返るために音を録音することや、ドキュメンテーションのような学びの可視化が容易にできるようになったが、録音された音は、その音を演奏した当の本人にとってどのように聴こえるのであろうか。例えば演奏者がタンバリンの音をレコーダーで録音するために、タンバリンを片手で持ち、もう片方の手でタンバリンの皮を打ち鳴らした時、その瞬間には打った感触や持ち手への振動と共に音波が発生し、演奏者の耳をはじめとする各感覚器官に届くと同時に、レコーダーに備わったマイクを通してデジタルの波形として変換され、指定されたビットレートでメモリに記録される。では、その録音された音をできるだけ間を空けずに再生して聴取した時、実際に鳴っていたタンバリンの音と、録音されたタンバリンの音は、演奏した当事者にとって同じものであると認識するのであろうか。「演奏する」と「聴く」がほぼ同時に行われる前者の音に対し、「演奏する」という身体性から切り離された後者のデジタル音は、演奏者が内省的に「聴く」ことを容易にすると予測できるが、Yamamoto(2018)らの研究では、母親がおもちゃの遊びの手順を子どもへ説明する際に、遅延のないビデオ通話で行った場合（Live condition）と、映像と音声に1秒のタイムラグが発生するビデオ通話で行った場合（Delayed condition）で比較したところ、遅延のない条件下の子どもの方が、母親が説明した遊びの手順を模倣するスコアが高いことが明らかにしている^[1]。この結果は、母親の反応の微妙な時間的遅れが幼児の模倣学習に与える影響の可能性を示唆していると同時に、「遅延した再生」が学習者の学びに何らかの影響を与えることの証明であると考えられる。この示唆を踏まえ、演奏からわずか数秒の遅延時間の後に再生された音を聴取した学習者は、どのようにその音を認識し、合奏や音楽をつくる活動に役立てるのだろうか。また幼児の音楽表現を支援するためのツールとして「遅延した再生」はどのような教育的意義が検討できるであろうか。

上述した問題意識から、本研究では研究課題を『遅延した再生』を通じて自分の音に耳をすます活動を提案・実践することによって、学習者の音楽表現にどのような影響を与えるのか、その教育的意義について考察すると設定し、領域「表現」における音楽表現について、「情報機器及び機材の活用」の観点からの知見を得ることを目的とする。

2. 研究の方法と結果

保育者養成校として保育士資格ならびに幼稚園教諭二種免許状を取得することが可能な保育科の1年生67名（男子8名、女子59名）を対象に集団比較実験計画法を採用し、本研究者によって提案される、「遅延した再生」を活用した即興的な音あそびを実践してから合奏演習に取り組む実験群32名（グループA）と、通常の合奏演習のみを行う統制群35名（グループB）で活動を行った後、

その学習結果の違いについて分析を行う。「遅延した再生」を発生させる機器としては、DAWの録音機能と、ループ・ステーションであるRC-30を併用して行う。「遅延した再生」を繰り返すことのできる環境構成を次の図1のように設定した。



(図1) 録音と同時に「遅延した再生」を繰り返す環境構成

上記のシステムを活用して、音を即興的に重ねることのできる音あそびの手続きとしては次の表1の通りである。

(表1) 提案されるICTを活用した音あそびの手続き

<ul style="list-style-type: none"> ・学生は6人前後でチームを編成する。 ・チーム毎に合奏練習する楽曲を選択、および担当する楽器を決定する。 <ol style="list-style-type: none"> ① チームの中で演奏する順番を決める。 ② 1人目は、マイクの前で自分たちのチームで使用する楽器を演奏する。その際の鳴らし方は任意。マイクの位置等の関係で自分の楽器が使えない場合は、他の楽器でも可とする。 ③ 録音した音が再生を2秒間隔で繰り返されるので、その音をチーム全員で聴く。 ④ 次の順番の演奏者は、繰り返し再生される音の中で、好きなタイミングで楽器を鳴らす。 ⑤ ここまでに演奏した音が繰り返し再生されるのを、チーム全員で聴く。 ⑥ チームの演奏者全員が終わるまで、④⑤を繰り返す。

実験群の学生32名(グループA)のみ、上記表1で提案した「遅延した再生」を活用した即興的音あそびを行い、統制群の学生35名(グループB)については、音あそびを実施しなかった。その後、どちらもチームも、保育で活用する合奏練習に取り組み、その学習成果について分析を行った。

本研究の分析は、実践終了後に実験群と統制群の両グループに配布する質問紙調査を通じて行われた。質問紙調査としては、自由記述に対する記述統計およびコーディングと、四件法のアンケート回答に対して実施する検定の2つの方法で分析・考察を行った。分析結果としては、実験群と統制群による質問紙調査の結果を比較検討したところ、「音量」や「リズム」に工夫しながら自らの音楽表現を検討する記述を確認することができた。具体的な記述、およびその考察については、本要旨では紙幅の都合から不可能であるため、口頭発表時に示す予定である。

<参考文献>

[1] Eriko Yamamoto, Goh Matsuda, Kaori Nagata, Naoko Dan, Kazuo Hiraki.(2018) Subtle temporal delays of mothers' responses affect imitation learning in children: Mother-child interaction study Journal of Experimental Child Psychology 179(2), pp.126-142.

保育者・小学校教員養成校におけるリズム指導に関する一考察 —身体表現を通して—

山岸 多恵（兵庫教育大学非常勤講師・関西地区）

1. はじめに

筆者は複数の保育者・小学校教員養成校で授業を担当しているが、それらの学校では受講生が弾き歌いを学ぶ際に様々な問題に直面している様子が見られる。授業工夫として筆者はこれまでも弾き歌いやピアノ指導に関する効果的なアプローチの方法を検討してきた。

A 保育者養成校において筆者は、「音楽Ⅱ」「音楽Ⅳ」「保育内容演習・音楽表現指導法」の授業などを担当している。「音楽Ⅱ」「音楽Ⅳ」の授業では、『バイエルピアノ教則本』、『ブルグミュラー25の練習曲』などのピアノ練習曲集や、『幼児のうた100曲』⁽¹⁾、『こどものうた100』⁽²⁾などを教材とした弾き歌いの指導を行なっている。読譜の際に音高については自ら間違いに気づき修正する学生の様子が見られるが、リズムに関しては間違いに気づきにくい様子が多く見られた。

これまでもリズムに関しては、音符に言葉を当てはめたリズムあそび、手拍子、リズム打ちなど多くの指導方法が研究されている。高崎(2016)は、「読譜をする際、階名を読むことに比べて、リズムの読み取りは間違いやすく、疎かになりやすい。」⁽³⁾と述べた上で、それを補うためにリズムのみの練習課題を作成して提示している。

本研究では、学生が読譜を円滑に行い正しいリズムで演奏できるようになるためには、授業でどのような工夫が必要であるかを考察した。読譜の際に間違いやすい付点8分音符・16分音符・付点8分音符・16分音符の組み合わせ（♪♪♪♪）と、付点8分音符・16分音符・8分音符・8分音符の組み合わせ（♪♪♪♪）に焦点を当て、それらのリズムに沿った全身による身体表現を行なうことでまずリズムの違いに気づくことができるのではないかと考え実践した。

2. 研究の方法

2021年12月に行なった授業を対象とし、以下のような授業実践と学生の自由記述アンケートの分析によるものとする。

対象者は、A 保育者養成校「保育内容演習・音楽表現指導法」の受講生1年生の31名である。アンケート結果の研究使用については当該校の承諾を得ている。

3. 授業実践

「保育内容演習・音楽表現指導法」では15回を通して、読譜・こどもの歌の伴奏・弾き歌いの際に必要と考えられる音楽理論についても実践を交えて授業を行なっている。

本授業では、鍵盤楽器を2人に1台用意し、身体表現の活動が行なえる環境を整えて実践した。教材は弾き歌いにおいてこれまでもリズムの間違いが多く見られた「おべんとう」（天野蝶作詞・一宮道子作曲）と「かたつむり」（文部省唱歌）を取り上げた。

学生が楽譜を見ながら「おべんとう」の冒頭4小節を歌う様子を順に確認した。譜例1が本来の楽譜であるが、1・2・3小節目の2拍目にも付点がつけられた譜例2のようなリズムで歌う学生が多く見られた。これまでも弾き歌い演習において、間違いやすいリズムについて手拍子などを用

いて指導を行ってきたが、あまり改善されなかった。

譜例 1

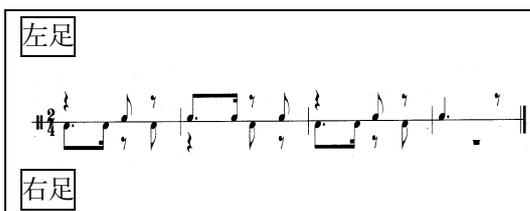


譜例 2

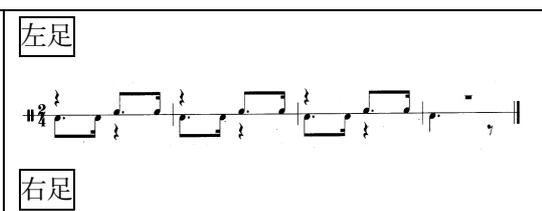


手拍子などだけでなく、全身による身体表現を行うことでリズムの違いについて明確に気づくことができるのではないかと考え、譜例 3 と譜例 4 の楽譜を学生に提示して以下のような実践を行なった。譜例 3 と譜例 4 は上段を左足、下段を右足でステップするリズムを示している。譜例 3 と譜例 4 の 1 小節目を比較すると、足の動きは譜例 3 では、右足→右足→左足→右足、譜例 4 では右足→右足→左足→左足となり、ここではステップの違いを体感した。

譜例 3



譜例 4



以上のような全身を用いた身体表現を行なうことにより、学生は譜例 1 と譜例 2 に示したリズムの違いに気付くことができた。リズムの違いを体感した後に、譜例 1 の楽譜を右手のみで弾き歌いを行なった。付点 8 分音符・16 分音符の組み合わせと 8 分音符・8 分音符の組み合わせの違いも認識した上で、全員が正確なリズムで演奏することができた。次に「かたつむり」でも同様に実践した。

学生は楽譜による違いを体感することにより、正しいリズムを理解することにつながったと考えられる。

4. 結果と考察

授業後の自由記述アンケートでは、身体表現を行なうことによりリズムの違いを理解でき正しい演奏につながったといった肯定的な記述が 96.8%、演奏に上手くつながったかどうかわからないとの回答が 3.2%であった。読譜→全身を用いた身体表現→演奏というサイクルを繰り返すことにより、学生が正しいリズムで演奏できる一助になったと考える。

5. 今後の課題

今回は、読譜の導入部分とも言える授業実践であったが、今後も身体表現を効果的に活用し、読譜のみに留まらず演奏の際においても学生の表現力につながる授業工夫を検討したいと考える。

【参考・引用文献】

- (1) 在原章子・菊本哲也・三好優美子・柳田憲一・山内悠子共著『新版 和音伴奏による幼児のうた 100 曲』[第 2 版] 全音楽譜出版社 (2016)
- (2) 小林美実監修 井戸和秀編『こどものうた 100』チャイルド本社 (2016)
- (3) 高崎展好「保育者養成における音楽表現のためのリズム・ソルフェージュ指導法」『環太平洋大学研究紀要』(2016) p.35

全国大学音楽教育学会 第37回全国大会《オンライン開催》

主催：全国大学音楽教育学会

主管：全国大学音楽教育学会中・四国地区学会

実行委員会

実行委員長	梶間 奈保（島根県立大学）
副実行委員長	久光 明美（宇部フロンティア大学短期大学部）
	山川 智馨（鳥取短期大学）
事務局長	別府 祐子（倉敷市立短期大学）
実行委員	小池 美知子（松山東雲女子大学）
	安藤 千秋（香川短期大学）
	居原田 洋子（美作大学短期大学部）
	竹村 正（高知学園短期大学）
	藤山 あやか（滋賀文教短期大学）

大会運営委員

竹下 加奈子（新見公立大学）
十河 治幸（今治明德短期大学）
明本 遥（大阪健康福祉短期大学）
上田 豊（吉備国際大学）
永田 実穂（山口芸術短期大学）
児嶋 輝美（徳島文理大学短期大学部）

全国大学音楽教育学会 第37回全国大会《オンライン開催》プログラム Web 版

2022年8月26日発行

発行所 全国大学音楽教育学会 第37回全国大会事務局

〒711-093 岡山県倉敷市児島稗田160

倉敷市立短期大学（別府 祐子）

E-mail : beppu@m.kurashiki-cu.ac.jp

National Association of College Music Education

全国大学音乐教育学会